

かわいがながひじゆうひですべん

遥かな地球の夢を生き続けていくために

創業30周年

FAR夢

食産業を支える夢
貴重な資源を活用する夢
共生の理想を実現する夢
地球環境を守る夢
幸せを生み出す夢



△ フームエイジ株式会社

〒061-0212 北海道石狩郡当別町字金沢166番地8 tel (0133) 22-3060 fax (0133) 22-3013
<http://www.farmage.co.jp> E-mail : info@farmage.co.jp



貢献できること、大切なこと 無我夢中で取り組んでいるうちに 活動の領域がどんどん広がりました



2015年3月、私たちファームエイジ株式会社は、創業満30周年を迎えることができました。これもひとえに皆さま方のご理解、ご支援、ご厚誼の賜であり、つね日頃からの感謝の気持と合わせまして、ここに改めて深く御礼を申し上げます。

30年という時間は、人間社会いえば、産まれた子が次の世代の子をつくるまでの期間、およそ一世代に相当します。最近になってようやく、放牧を志す若者たちが次々に現れはじめた状況を見ますと、なるほど30年はひとつ節目であるのだなと実感します。

しかしその一方では、やはり己の力不足を痛感させられる契機もあります。この30年は私たちにとってまったく開拓の時代でした。手付かずの大地にスコップを入れ、少しづつ掘り起こし、種を蒔き、土から育てる毎日です。それが楽しい思い出ばかりなのは、これで日本の農業を変えられるのではないか、変えようではないか、という理想と使命感につき動かされ、ただただ無我夢中で取り組んできたからなのだと思います。

その結果いま、私たちは多岐にわたる領域で幅広く、また多様に活動しています。放牧システムと野生動物対策、つまり動物コントロールシステムの普及を主軸としながら、たとえばその技術の導入・開発、酪農のいわゆる六次産業化、海外の酪農文化の紹介などにも注力しています。さらに農場や里山の環境を活用した新しい田園型ライフスタイルの提案にも取り組んでいます。

従来の経営的観点からいえば、新しく事業を立ち上げる際には、経営資源をできるだけ一点に集中し、効率と競争力を高めるのが常識です。しかし敢えてその道を選ばなかつたのは、ただ利益をあげることだけが目的ではないからです。

「FAR夢」としてまとめた私たちの理念があります

「食産業を支える夢」

「貴重な資源を活用する夢」

「共生の理想を実現する夢」

「地球環境を守る夢」

「幸せを生み出す夢」

これらの夢実現が私たちの目標です。そしてそのためには、これまでの社会や企業のありかたを捉え直し、従来のカテゴリーやコンセプトを編集し直して、新しくはじめていく試みが必要だと考えています。

さて、それでは私たちはこのさまざまな取り組みをどの程度まで前進させられたでしょう。それはまだまだ端緒についたばかり、ようやく課題の全体像が見えてきたところ、というのが正直な実感です。この開拓者、私たちは、30年間、懸命にスコップをふるつては課題ばかりを掘り起こしてきたようです。

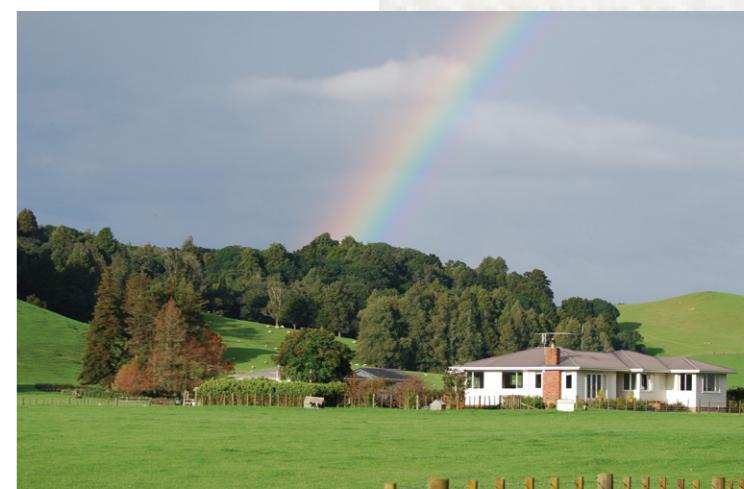
しかし、ゼロから1を生み出したのだ、新しい歴史のはじまりを創造したのだという誇りと自負も同時にあります。これからは、探し当てた課題の一つひとつを大切に、丁寧に具体化していくながら、またこれからも倦まず諦めず、新しい物事、領域に挑戦していきます。

外からご覧になると捕まえどころのない、ちょっと変わった会社かもしれません。しかし人と動物と自然環境のため、持続可能な未来のために精いっぱい頑張ってまいります。今後ともご理解を賜りますようお願い申し上げます。

【事業内容】

- 動物コントロールシステムの提案
- 持続可能なファームデザインおよび地域デザインの提案
- 「創地農業 21」の主宰・運営
- グラスファーミングスクールの開催
- フィールディズ・イン・ジャパンの開催
- 当別町農村都市交流研究会への参画
- ニュージーランドスタディツアーの企画・運営
- びっくりドンキーの運営

フェンスを売つていませんが
仕切りや枠にはとらわれない会社です



苦労話としてではなく、日本の酪農史の1ページとして こんなお話をすることは、もうきつとないでしょうけれど

ファームエイジ株式会社の創業は、小谷栄二がサラリーマン時代、なかば偶然にニュージーランド製電気柵の販売を担当したことがきっかけでした。7軒の酪農家さんにその時点で得られたノウハウとシステムを導入させていただいたところ、信じ難い成果が出たのです。

たとえば、導入からの1年で、対前年50万円から500万円もの増益、労働時間30%から40%の削減、しかも牛が健康になり、資材投資額は1軒約20万円から30万円でした。

それまで家畜に濃厚飼料を効率的に給与するためのシステムの販売、つまりアメリカ型酪農の宣伝に努めてきた小谷にとっても、この事実は大きな衝撃でした。

そして、このCGS(Controlled Grazing Systems=コントロールされた放牧システム)をうまく導入できれば画期的なことになるかもしれないと考えたのです。

「坂本龍馬は32歳で日本をまとめた。よし、自分も32歳までにこのシステムと技術をもって日本の農業を変革してみせる!龍馬に負けられない」と若き小谷。「フェンスで日本の農業を変革する」という創業精神の誕生でした。

たった一人でスタートした会社でしたから、なにもかもが不足していました。はじめて受注した公共工事では、厳冬の宗谷岬、猛吹雪の中、家族、友人、その知り合い、さらには道庁の職員、その牧場の事務員さんの彼氏と父上(いずれも漁師さん)、加えてお仲間の漁師さんたちにまで助けられて柵を張ったことさえありました。こんな破天荒な仕事ができたのも、「日本の農業を変革する」という情熱があつたからこそです。

そして仲間(同志)が増え、各地で会えば、いつも、どうすればこの地域に放牧のシステムを普及できるだろうか、とひと晩中、空が明るくなるまで話し合ったことも数え切れないといいます。

しかし、ニュージーランド型の放牧が一般的な理解を得るためにには、やはり時間がかかりました。酪農家の方々にしてみれば生活がかかっています。すでに多額の借り入れがある場合も少なくありません。これまでとまったく異なる考え方、技術には慎重になって当然なのです。

放牧のメリットを説明しに各地を回り、講演会などを開いても相手にされない、聞いてもらえない状況が続きます。ものめずらしさから半ば余興のように呼ばれ、講演の最後には掴みかからんばかりの勢いで罵倒されることさえあります。

そんな状況で最も力になってくれたのは、やはり導入した方々、“同志”的実際の成功談でした。気づけばこの2、3年、否定的な声がようやく聞えなくなっていました。

農業は、自分のためであると同時に、地域を守るものでもあり、ひいてはその結果が地球を守ることにもつながる誇り高き職業です。そして放牧システムは、その誇りによく応えうる生産と共生の方法です。単に経済のためだけのものではありません。

私たちファームエイジ株式会社は、理念や哲学を、ただ理想のままに終わらすことなく、きちんと生活できるシステムに具体化し、ノウハウや情報、ネットワークとともにご提案していきます。それが誇り高き農業者に対する私たちのミッションです。

さあ、洋々たる放牧の歴史が動きはじめています。

【沿革】

1985年	3月	ガラガーエイジ株式会社設立
	11月	第1回ニュージーランドスタディツアーオープン(以降毎年開催)
	12月	日本ではじめて大型牧場(宗谷畜産公社)へ電気柵を納入する(約2000haの牧場へ延長距離200kmの電気柵を設置、その後の公共牧場電気柵導入のモデルとなる)
1986年		エゾシカ対策として道東地域へ電気柵を導入するも跳び越えられ失敗を繰り返す
1987年		エゾシカ用電気柵の改良版が足寄、帯広にて成功する
1988年		エゾシカ用電気柵の普及版が完成
1989年		エゾシカ用電気柵が北海道庁補助対象となる
1990年		北海道エゾシカ問題検討委員会発足 小谷栄二、検討委員に就任。 エゾシカ用電気柵導入マニュアルを作成し全道へ配布される
1993年		新社屋完成
1995年		「創地農業21」発足 代表:庄司昭夫(株式会社アレフ創業者)、副代表:小谷栄二
1996年		第1回「グラスファーミングスクール」開催(以降毎年開催) 「当別町農村都市交流研究会」発足。小谷栄二、代表に就任
1997年		北海道のエゾシカに関わる中心メンバーを編成して欧州への視察・研修を実施(参加者:行政、試験場、大学、と畜場、新聞社、野生動物調査員、自治体、当社2名)
1999年		「びっくりドンキーフーム野幌店」オープン
2000年		本社隣りにデモンストレーションファーム開設 ブラウンスイス飼育
2001年		「社団法人 エゾシカ協会設立」小谷栄二、理事に就任 「グラスミルク」事業、足寄研修牧場取得(2003年終了)
2002年		「びっくりドンキーフーム太平店」取得
2004年		第1回「フィールデイズ・イン・ジャパン」開催(以降毎年開催) ニュージーランドスタイルの「ファーマーズショップKIWI」を社屋1階にオープン
2005年		第1回「食・農・環境セミナー」開催 当初は「ふゆみずたんぽ」勉強会を中心に行催 「草食動物が拓く里山プロジェクト」として道産子馬を本社裏山にて放牧試験(3年間の北海道大学との共同研究)
2006年		「ファームエイジ株式会社」へ社名変更 当別町農村都市交流研究会が「わが村は美しくー北海道」(人の交流部門)銅賞受賞(国土交通省主催)
2008年		FAR夢ブランド製品全国展開達成(全ての府県に納入)
2009年		小谷栄二「社団法人 北海道草地協会」理事就任
2010年		ニュージーランド放牧牛の凍結精液の販売を開始(日本初)
2011年		グラスファーミングスクール・経営コース開設 小笠原諸島にて外来種のブランナリア(ナメクジの一種)の捕食により、絶滅に瀕していた島固有のカツツムリを自社開発(世界初)の電気柵により保護に成功 その2ヵ月後に世界遺産登録となる
2014年		グラスファーミングスクール・ビギナーコース開設 ニュージーランド 北海道 酪農協力プロジェクト発足 (日本側窓口を担当)
2015年		FAR夢モデルビレッジのコンセプト立案 ニュージーランド 北海道 酪農協力プロジェクト調査開始 プロフェンサー部門開設 (ニュージーランドプロフェンサー提携、特殊専用機械開発)



少し白い目で見られていました
30年間のうち、ほぼ28年間は



「フェンスで日本の農業を変革する」夢へ まだまだ、もっともっと これからです

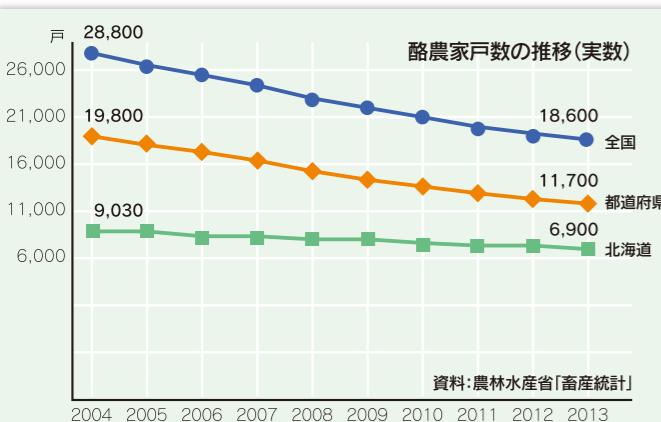
日本の酪農はいま、TPPに代表される国際化の大きなうねりにさらされており、他方、国内的には就労者の高齢化や後継者不足という問題を抱えています。

こうした状況に対して、民間の生乳売買プラットフォームの登場や行政・団体による畜産クラスターの推進など、新しい動きも出ています。それらはおおむね、生産の現場においては、相変わらず大規模集約化によるコストダウンをめざすもののように見受けられます。

私たちがめざしている酪農は、コストダウンはもちろん

んですが、それに加えて消費者の安全と安心をしっかりと守り、健康に貢献し、環境と調和し、無理なく持続していく多角的価値をもつ酪農です。創業以来一貫して追求しているこの道にこそ、日本酪農の繁栄があるという確信は、時代がどんなに変わっても揺るぎません。

ここでは、これからもその豊かな未来に挑戦していくために、いまいちど酪農の現在の姿を客観的に直視しておきたいと思います。



輸入穀物に依存した日本の畜産では、家畜に多大なストレスを与え、肉や酪農製品の健全性を脅かし、ときにはそれが美食だとしてもてはやされています。自然に育った動物性蛋白質であるジビエに高い付加価値を与える欧米の常識とは大きくかけ離れています。

これは日本における肉食、畜産の経験の少なさに由来しています。いまでも日本の畜産の世界と野生動物の世界はまったくの別物であり、それぞれに業界や学界、行政区分があります。

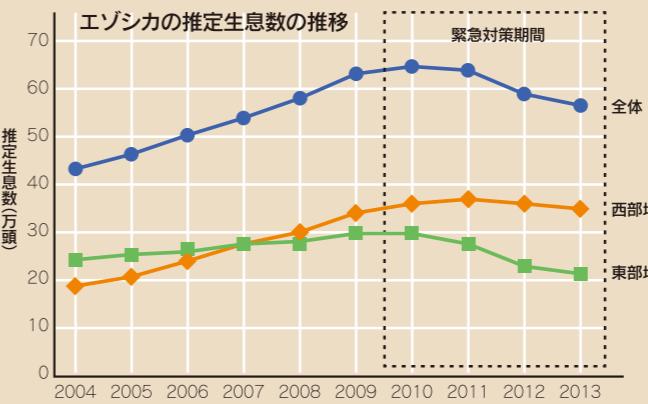
私たちファームエイジ株式会社は、家畜と野生動物の両方のコントロールシステムをビジネスとしていますか

ら、それがよくわかります。人間の都合だけを優先し、経済の論理だけで農業に取り組んできた結果、野生動物は排除されるばかりで、家畜同様に資源であるという視点が育たなかつたのです。農業ときちんと共生する野生動物の活用、これもまた私たちの大きな課題です。



毎年およそ60億円の農林業被害をもたらすエゾシカの有効利用に取り組んでいます

エゾシカは、2010年から約10万頭を捕獲するなどの緊急対策が取られています。なおおよそ55万頭もが北海道全域に生息しています。私たちは防護柵などのコントロールに取り組むと同時に、「一般社団法人エゾシカ協会」(理事:小谷栄二)を通して、資源としての活用をめざしています。



日本ではじめて ニュージーランド放牧牛の 凍結精液を輸入しました

ニュージーランドで草地を基盤とする酪農技術が急速に発展し始めたのは、1920年代末からです。1950年には、草地の集約的利用を可能にした電気柵が開発されました。こうした、まさに正攻法といえる技術的な蓄積をもとにして、ニュージーランドの酪農は1980年代の大規模な経済改革による補助金の撤廃など、いくつもの危機を乗り越えてきました。飼料は草地でまかなう、この原則に忠実なことで、コストを抑え、品質を高め、すぐれた国際競争力を身につけてきました。

ニュージーランドの土づくり、草づくりの知識や技術は、これまでもグラスファーミングスクールなどを通して学ぶことができました。しかし牛の改良については一朝一夕にできるものではありません。その移入は長年、大きな課題として残されていました。

ニュージーランドにおいて改良された牛は、単年で見れば乳量は少なくとも、生涯を通して確実に利益をあげる牛に仕上げられています。草を食むのに適した幅広く平たい口元、放牧地をしっかりと歩き回る強じんな足、そして小型で効率的な体型と、一見してわかる多くの特長を備えています。

さらに見えない部分で特筆すべきは、やはり粗飼料の牛乳への変換効率が高いことと繁殖率が高いことです。繁殖率においては、ニュージーランドのデータによると、平均種付け回数は1.3回です（導入品種）。これは全体の約95%を占める年に1回の季節分娩をスムーズに行なうために欠かせない特質なのです。また、凍結精液の供給元であるCRVアンブリード社は、この繁殖率の高さに着目し、同時に先行き不安定な穀物価格を不安視したアメリカからの求めにも応じたことでも注目をされました。

こうしたすぐれた性質を備えたニュージーランド放牧牛の凍結精液を、私たちが日本ではじめて輸入の実現に導いたのは2010年の秋でした。まだ放牧が一般的ではない日本の事情を勘案して、放牧と濃厚飼料の給与を併行できるタイプも加えて2品種でのスタートです。

そして2012年の1月、北海道別海町の今井牧場で記念すべき国産第1号の“放牧牛”が誕生したのです。今井真人氏によると、子牛は生まれてすぐに駆け出すほど活力に充ちていたといいます。いまその牛は立派な成牛となり、泌乳をはじめています。

また2014年には次の世代の繁殖のために、もう1品種の導入もスタートしています。

【ニュージーランド放牧牛の特長】

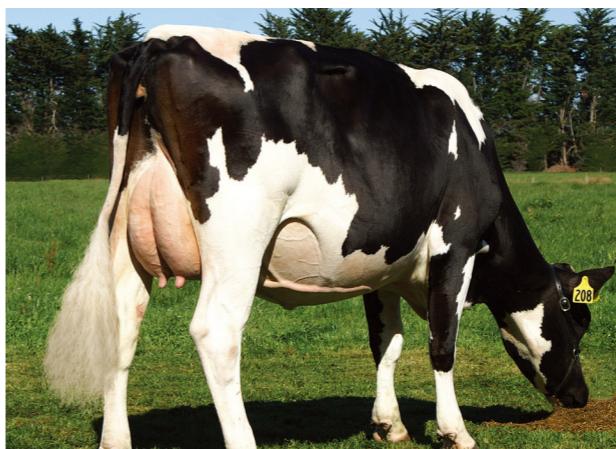
- 従順、温和な気質
搾乳や牧区移動などの管理がスムーズにできます
- 放牧に適した機能的な体型
地面の牧草が食べやすくエネルギー効率の高い小柄な体付きです
- 牧草中心で年間乳量約4500kg
飼料代を大幅に削減して利益確保が図れます
※228日ベース
- 長い泌乳期間・生産寿命
乳量を維持しながら平均5、6産します
- すぐれた繁殖能力
授精までの平均種付け回数1.3回。しかも自然分娩です
- 日本で登録済
家畜改良増殖法に基づく血統登録ができます
- 信頼と実績の供給元
世界第3位の人工授精専門会社「CRVアンブリード社」の精液です



2010年導入
■放牧タイプ
(登録番号:103505)
NZH-103505 〈テレス ユーオン フイレンツエ〉



2010年導入
■放牧+濃厚飼料タイプ
(登録番号:672213)
NZH-672213 〈トツプ デツキ KO ピエリ〉販売終了



2014年導入
■放牧タイプ
(登録番号:106538)
NZH-106538 〈オークラ オーマン オーバードライブ〉

精液のお求め・お問い合わせは、各地のJA、ノーサイ、または家畜人工授精所まで

◆輸入元:ファームエイジ株式会社

2011

グラスファーミングスクールに 経営コースを新設

商品開発や流通、経営全般にも強い、
全方位型の生産者をめざしています

生乳を出荷して終る酪農から、消費者のニーズに応え、消費者の手もとに製品を送り届ける酪農へ。組合勘定から一般企業と同じレベルのマネジメントへ。単に付加価値や収益性を高めるだけでなく、消費者にとってもよりよく、魅力的な酪農経営を実現するために必要な進化です。

従来は一部スクールの時間を割いたり、または各地での寺子屋方式のセミナーなどで取り組んでいたこれらに関する指導を、2011年から秋季の経営コースとして独立させました。具体的な内容は

- (1)商品企画から製造・加工、流通・販売まで実例を交えたノウハウ
- (2)組合勘定と企業会計、経営診断。現代の企業経営の合理性と、経営者に必要な考え方
- (3)人生設計(事業計画)のつくり方
- (4)成功している生産者の発表

などを盛り込んでいます。

開催日程は、1泊2日程度。講師や指導の理解を支えるサポーターには、乳製品製造業、流通業や外食産業などで実績のある方、活躍中の方に加えて、食品分析の専門家、税理士など、関連する幅広い分野のスペシャリストにもご協力をいただいています。



2014

グラスファーミングスクールに ビギナーコースを開設

ニュージーランド型放牧システムの全体を
基礎からわかりやすく指導しています

とりあえず放牧の実践牧場を見学してみたい、知識ゼロから学びたい、あるいは、いきなりアドバンスコースに参加してもついていけるか不安、また、1日しか時間が取れそうにないといった方々のために、「ビギナーコース」を開設しました。

その第1回目となった2014年のスクールでは、予定定員(30名)の約2倍ものご応募をいただき、対応と準備におおわらわになった一幕もありました。当日のプログラムでは、ガビン・シース博士(草地農学博士)の指導のもと、実際の放牧場で、土・草・牛に関する充実したフィールドワークが展開されました。

参加された方々のなかには一般的の酪農家に混じって

学生の姿も多く、いまや見通しが立てば酪農に取り組みたいと考えている若者が少くないことを改めて実感させられています。

.....[グラスファーミングスクール].....

●夏季講座
アドバンスコース(2泊3日)
フィールドワーク、ワークショップなど
ビギナーコース(1日)
牧場視察など
(連続してアドバンスコースを受講できます)

●秋季講座
経営コース(1泊2日)

2014 「ニュージーランド・北海道 酪農協力プロジェクト」

New Zealand Hokkaido Daily Collaboration Project
スタートしました

「ニュージーランド・北海道酪農協力プロジェクト」とは、ニュージーランド最大の酪農協同組合であるフォンテラとニュージーランド政府が出資し、日本の酪農家と共同で行う、北海道の放牧酪農に関する2年間の調査プロジェクトです。フォンテラは約10,500の酪農家が参加する協同組合ですから、このプロジェクトはニュージーランドの酪農家による北海道の酪農家への支援、協力といえるでしょう。

プロジェクトの目的は、放牧による牧草地の利用効率の向上、生乳の生産性、品質の改善、経済的な生産性の向上。具体的には、北海道の放牧酪農場4戸と農協所有の大規模農場1戸から1生産期にわたって農場データおよび生産性と経済性に関するデータを収集、モニターシ、分析します。これにはもちろん、夏季の屋外での放牧期間と冬季の屋内での飼育期間中のデータ収集も含まれます。

プロジェクトの運営は、北海道庁とホクレン農業協同組合連合会の協力を得て、ニュージーランド政府とフォンテラと小社ファームエイジ株式会社によって共同で担当しています。

すでに2015年5月に開催された第30回グラスファーミングスクールで、中間報告されました。さらに7月には第2回目の中間報告が行われる予定です。その後、指標の作成などを経て、2016年5月には最終報告が行われます。

酪農家にはまさに素晴らしいケーススタディの機会です。これからもぜひ継続的にチェックしていただきたいと思います。



当プロジェクトのリーフレットを
さしあげています

●ご希望の方は
ファームエイジ株式会社
担当：高田
E-mail takada@farmage.co.jp
tel 0120-82-4390
fax (0133) 22-3013

私たちファームエイジ株式会社は、放牧の実際を現地で学んでいただく「ニュージーランドスタディツアーアー」を、創業の年の1985年11月から毎年実施してきました。ツアーの日程はおよそ1週間で、詳細は毎年変わりますが、プログラムの基本は、土づくり草づくりの牧草管理技術から搾乳まで、多くのすぐれたノウハウを一度に、効率的に学ぶことです。

そのために、数軒の牧場を訪れ、日本よりもおよそ二回りほども体が小さくて元気な牛、牧区の移動と搾乳作業の一体化、1日1回搾乳などを目のあたりにしながら、生産者から直接の説明を受け、質疑応答や意見の交換なども活発に行います。

さらに、政府機関や現地企業との提携によって、技術面での講習や実地研修の機会も豊富に設けています。

また、農・畜産への誇りと愛情を感じさせる豊かなラ

イフスタイルと農場文化に接することができるのも、「ニュージーランドスタディツアーアー」ならではです。というのも、ニュージーランドでは、乳牛の場合、春の直前にいっせいの季節分娩を行っています。飼料の消費を抑えたい冬の2ヶ月間が乾乳期になって合理的ですし、しかも搾乳の手間がかからないので、酪農家は長期的な休暇が取れます。こうしたゆとりある環境で育まれたライフスタイルは、いつも参加者を魅了しています。

「ニュージーランドスタディツアーアー」は2015年で28回を数え、参加者数は300名を超えるました。参加者のプロフィールは、酪農を中心とする畜産農家が約6割、残り4割が行政や農協の担当者、指導者などです。最近では参加希望者が増えて、現地の受け入れ態勢の充実に迫られているところです。

先行者、ニュージーランド酪農が陥った「予測された危機」 原理原則を守る大切さを、改めて再確認しました

1980年代の危機を乗り越えたニュージーランド酪農は、一気に世界最大の乳製品輸出国にまで登り詰めました。総人口が約450万人程度ですから国内市場は小さく、生乳の約95%を加工品として輸出しているのです。見方を変えれば、ニュージーランドの酪農経営は国際的な乳製品需要動向に大きく影響される体质にあります。

そこに現ってきたのが、経済発展の著しい中国でした。その需要は凄まじく、全粉乳を中心とする乳製品の総輸出量は、2005年からの7年間で約70%も増加しました。国別の輸出割合を見ても、中国は2014年3月時点で36%を占めて断然の1位でした。

しかしその直後から中国による乳製品の在庫調整がはじまります。そのために10年前の約2倍(約55円)にまで上がっていたニュージーランドの乳価は、2015年に入って一気に約28円も値下がりしました。半値です。ニュージーランド国内では、6月(2015年)の段階で、約48%の酪農家が赤字だという報道がなされていました。実は急激な需要の高まり、乳価の高騰を受けて、牧草

以外の飼料、穀類などを補助的に与え、乳量を増やした酪農家が少なくなかったのです。

小社の代表、小谷栄二も昨年の段階で危険を感じて、ニュージーランドで会う人ごとに忠告していましたが、多くは穀物価格が下がらない限り乳価も下がらないから大丈夫だろうとの見通しを立てていたそうです。しかし実際には何の前触れもない中国の輸入の手控えですぐさま暴落してしまいました。

こうした状態でも、ニュージーランドの酪農家や政治家にいわせば、今まで何度も同じような困難を乗り越え強くなってきたのだから大丈夫ということです。確かに20円台の乳価でもやっていける技術がありますから、このまま衰退するなどということはないでしょう。しかしながら、環境や安心・安全への視点を一度は脇に置いて、ただ経済に振り回されてしまった違和感は残ります。幸い日本の市場はニュージーランドに較べて遙かに大きく、成熟しています。プレゼンに原理原則を守る、まずはここをしつかり抑えることが非常に大切だと改めて教えられました。



[グラスファーミングスクール沿革]

- (1996年)
第1回講座(豊富町)
テーマ:「世界一生産コストが安い、ニュージーランド型放牧の技術(牧草と草地システム)を学ぶ」
講師:エリック川辺博士、ガビン・シース博士、デヴィット・マッコール博士、アントニー・ロバーツ博士
- 第2回講座(新得町)
第3回講座(北広島市)
南米(アルゼンチン、パラグアイ)の農薬を使用しない放牧システムを視察
- (1997年)
第4回講座(足寄町)
第5回講座(十勝清水町・橋本牧場 & 十勝しんむら牧場)
- (1998年)
第6回講座(齊藤牧場)
第7回講座(浜中町)
第8回講座(上士幌町)
スタンダードコース/アドバンスコース制を導入
- (1999年)
第9回講座(札幌市/帯広市)
第10回講座(札幌市/帯広市)
水がない国で世界一の搾乳をするイスラエルの酪農を視察
エネルギー自給システムの先進地ドイツの酪農を視察
- (2000年)
第11回講座(白糠町)※エコロジカル開催
農業で自然との共生システムを研究しているコスタリカ・アース大学を視察
- (2001年)
第12回講座(新篠津村/当別町)※エコロジカル開催
- (2002年)
第13回講座(札幌市)※エコロジカル開催
バーマカルチャーの先進地オーストラリア・クリスタルウォーターズを視察
- (2003年)~●(2008年)
各年1回(第14回~第20回)の講座を開講
- (2009年)
第21回講座(上士幌町「新村農場」/足寄町「ありがとう牧場」/鹿追町)
テーマ:「草地と放牧システムの復習」「食と農をつなぐ」
- (2010年)
第22回講座(天塩町)の開講を予定するも口蹄疫国内発生のため中止
初の冬季講座(小樽市)
テーマ:「人を創り、食と農の未来を創る」
- (2011年)
第23回スクール夏季講座「土」(天塩町)
各回「土・草・牛」のうちの1テーマを学ぶシリーズ構成スタート
秋季講座・経営コース第1回(小樽市)
- (2012年)
第24回スクール夏季講座「草」(別海町)
第25回スクール秋季講座・経営コース(小樽市)
- (2013年)
第26回スクール夏季講座「牛」(十勝清水町)
第27回スクール秋季講座・経営コース(札幌市)
- (2014年)
第28回スクール夏季講座「土」(滝上町)
「土・草・牛」シリーズ第2期スタート!!
テーマ:「土とファームデザイン」
ビギナーコース開設
第29回スクール秋季講座・経営コース(札幌市)
- (2015年)
第30回スクール夏季講座「牛」(中川町)
テーマ:「良いミルクのための善い草づくりの高所得酪農システム」
第31回スクール秋季講座・経営コース(北広島市)
- (2016年)
第32回夏季講座「土」(浜頓別町・猿払村)

創地農業21

農業は、人と自然との接点であり、最も古くて新しい、普遍的な生産と成長と創造の場です。いまこそ社会全体がこの農業の限らない力を活用すべきです。「創地農業21」はこうした考え方を具体化すべく、食と環境と持続可能な社会に貢献しうる農業の普及、および人材の育成をめざして1995年暮れに発足しました。

「グラスファーミングスクール」を活動の主軸とし、先進的な取り組みを続けるスクールOBやコンサルタント、企業、研究機関などの協力をいただき、放牧による酪農や畜産業、そしてその第6次産業化のための研究・開発と普及に取り組んでいます。

■主な活動内容

1. 農業技術の研究・開発・普及
(セミナー、視察旅行など)
2. 農業リーダーの育成
(グラスファーミングスクールなど)
3. 親農業社会創出への支援
(フィールデイズ・イン・ジャパン、当別町農村都市交流研究会など)

■役員

代 表: 小谷栄二
(ファームエイジ株式会社 代表取締役)

副 代 表: 新村浩隆
(有限会社十勝しんむら牧場 代表取締役)

相 談 役: 佐藤琢磨
(Noen Cafe 代表)

事務局長: 下村好子

[事務局]

〒061-0212 北海道石狩郡当別町字金沢166番地

ファームエイジ株式会社 内 担当: 下村好子

tel(0133)22-3060 fax(0133)33-3013

<http://www.farmage.co.jp>

E-mail: shimomura@farmage.co.jp

自然は1枚の壮大なタペストリーです
無数の生命が織り合わさり重なりあって
調和の物語を紡いでいます
私たちもそのなかで確かに繋がっていく
1本の縦糸のようありたいと思います

私たちファームエイジ株式会社は、農場を基点とし、自然環境と調和する持続可能な社会の実現をめざしています。それはいまの社会のありかたに大きな変化を求めることがあります。ですから、その変化はまず私たち自身の上にこそ表現されるべきだと考えています。

私たちはいま、主に2つの方法でその課題に取り組んでいます。ひとつは会社周辺のエコビレッジ=FAR夢ビレッジのモデル化です。これには「世界に発信できる、夢のある農村モデルをつくり上げる」ことをコンセプトに、北海道当別町の有志たちによって1998年に発足された「農村都市交流研究会」が中心的な役割を担っています。すでに30世帯ほどが移住し、田園でありながら都市の文化や感性も生かしたハイブリッドな生活環境を着々と実現しています。

さらに毎年恒例の農業祭「フィールデイズ・イン・ジャパン」の会場でもある小社デモファームも含めた、より広域的なランドスケープデザインに、専門家も交えて取り組んでいます。これらは放牧による地域おこし、町づくりを模索する自治体からも、先行するモデルケースとして注目されはじめています。「農村都市交流研究会」のコンセプトの通り、この地元当別町から日本全国、世界への発信力がますます高まっているところです。

もう一つの表現の方法は、私たちファームエイジ株式会社の社員一人ひとりです。その生き方といえば少し大きですが、それぞれの幸せを実現していく場であり続けることが、私たちファームエイジ株式会社の理想の一つの表現であると考えています。いわゆる社風、企業風土と呼ばれるものです。企業の側から働きかけてできるものではなく、ましてやトップダウンでは矛盾した話になってしまいます。

大切なのはファームエイジという場所にウソ偽りがなく、それぞれの主体性と個性を重んじること。おかげさま



で外部の方々からは、社員がみなユニークで楽しげだという評価をいただいているようです。

ファーム菜園などに続いてライフスタイルファーマーなど、これからも楽しい思いつきが次々に飛び出していくことをお互いに期待しあっているところです。

【社員のファームアクティビティ】

●デモファームでの牛・羊のコントロール、草地管理

朝礼当番が、牧草の伸びを見てデモファームの牛の牧区移動を決めます。もちろん水槽チェック、ホースの水漏れチェックなども行いますし、牛の健康状態なども管理します。こうすることで酪農家の気持ちや仕事の難しさに、全社員が体験をもって理解を深めています(もちろん素人の域を超ませんが)。昼休みに牧場を見に行くのを楽しみにしている社員もいます。

●アライグマの捕獲

時期になると朝礼当番が、タヌキやテンなどの誤認捕獲が無いかどうか箱わなをチェックしています。

●会社周辺の野生動物の生態調査

小社で販売しているセンサーダラマをいたるところに設置。ちなみにデモファームには清澄な環境の象徴でもあるホタルやニホンザリカニ、サンショウウオ、クマゲラもあります。もちろんエゾシカやタヌキ、キタキツネなども生息し、周辺ではエゾクロウ、ヒグマも確認されます。すべてのデータのまとめを目標にしている社員もいます。

●デモファームのデザイン

ランドスケープデザイナー(アーキテクト)などの協力も得ながら自分たちの考え方でデモファームをデザインし管理することを楽しんでいます。

仕事でも遊びでも生活だけでもない
ファームエイジというライフスタイルです



FAR夢ビレッジに、
ぜひお越しください

小社の拠点は創業から一貫して北海道石狩郡当別町の金沢地区にあります。30年前、創業直後にニュージーランドの人が来て、とてもよいところだといってくれました。それは自然があり農業があり、近くに海があり、大きなマーケット(海を渡れば1億人、違う海を渡れば10億人)がすぐ近くにあるからです。近くにマーケットがないニュージーランド人にとっては、設立したばかりのたった一人しかいない会社が宝の山に見えたようです。

私はそれを聞いて、いざれここを情報発信の場にすると決めました。親から譲ってもらった土地にデモファームをつくり、その周辺にこの土地の価値を理解できる人を集め、いざれ農村地域が崩壊する危険性が出てきたときのためにモデルをつくろうと決意したのです。そして大切なことは、そのような農的で、環境に配慮した暮らしをしたい人を集めるコーディネイターの存在だと考え、地元の人たちと一緒に「農村都市交流研究会」をつくりました。

お陰さまで30軒くらいのとてもユニークなコミュニティができました。その中の4軒には小社のスタッフが住み、中心的存在として活躍してくれています。8年前に新卒で入社した関西出身の社員も土地を購入しましたので、コミュニティの約2割が小社スタッフということになります。

といえば、スタッフ約30名のなかに当別町出身者は一人だけで、多くが九州も含めた本州出身者です。北海道の自然や動物に興味があり、冬は2mも雪が積もるので嫌がって都会へ出て行く人がいまでも後を絶たないところへ入ってくるわけですから、みな筋金入りの面白い人材です。後から考えてみると、時代の流れに逆行し、チャレンジする小社ファームエイジに向いている人材そのものなわけです。

見渡せば、ニワトリや羊、ウサギを飼う人がいて、こだわりのパン屋さん、苗屋さん、雑貨屋さんが店を開き、新聞社、JR、行政、図書館、電気屋、大学に勤める人、医者、整体師、建設コンサルタント、画家などなど多種にわたった人たちが集まっています。当別町内ではめずらしい人口増加地域です。ここに住みたくて住んでいる人は幸せです。ですから地域全体に幸せのオーラが蔓延しています。

このエコビレッジもまた、小社ファームエイジの歩みの成果のひとつであると、誇らしく思っています。

ファームエイジ株式会社
代表取締役社長 小谷栄二